



	2025-55
監督: ダニエル・ヘースル、ユリア・ニーマン	
脚本: ダニエル・ヘースル	
製作: ウルリヒ・ザイドル	
出演: ローレンス・ルップ/ウルシ ーナ・ラルディ/オリヴィ ア・ゴシュラー/キラ・クラ ウス/内田珠綺/ドミニ ク・ヴァルタ/マルクス・シ ュラインツァー/ハイモ ン・マリア・パッテンガー/ ゾーイ・シュトラウプ	

みどころ

何とも勇ましくかつ刺激的な邦題の本作は、オーストリア映画。米国では株式会社テスラのイーロン・マスク氏が超富裕層の代表だが、オーストリアでは本作の主人公がそれ。彼の趣味は“狩り”だが、その対象は『サファリ』（16年）や『ハタリ！』（62年）とは大違いの“人間狩り”だから、こりゃヤバイ！

目撃者や新聞記者からの追及に対して、彼は「なぜ誰も僕を止めない？」とシャーシャーと逆質問！さらに金正恩の娘・金主愛と同じように、2代目の継承者になること確実な（？）13歳の娘ステラも“人間狩り”に参戦！？こりゃ恐ろしい。そんな本作の結末は、あなた自身の目でしっかりと。

■□■オーストリアに誕生した若き監督夫妻の視点に注目！■□■

『我が眼』(原題『Veni Vidi Vici』)という、何とも勇ましくかつ刺激的な邦題の本作は、オーストリア映画。本作は、2024年「オーストリア映画週間 2024 Our Very Eye 揺るぎなき視線」で日本初上陸になったそうだ。オーストリア映画界では、ミヒャエル・ハネケ等の巨匠が有名だが、それに続いて、「その挑発的な視点、人間に対する深い洞察力を受け継いだ若き才能たち」が活躍しているらしい。

本作が監督デビュー作になったダニエル・ヘースルとユリア・ニーマンは夫婦で監督を務めているそうだが、ダニエル・ヘースルは、映画を通じてお金の価値を検証し、富にまつわる映画を撮り続けているし、彼らの作品はいつも富、権力、権利というテーマを扱っているそう。なるほど、なるほど。しかし、チランに「連続狙撃事件の容疑者はエレガントな億万長者 上流国民の“お遊び”に法の鉄槌は下るのかー」の文字が躍る本作は、彼らの夫婦監督としての上記のテーマ（価値観）とは正反対！？しかも『我が眼』という邦題は一体ナニ？

■□■エレガントな億万長者の“別の顔”は？■□■

本作の主人公は、起業家として億万長者になり上がり、幸福で充実した人生を送るマイナート家の長であるアモン（ローレンス・ルップ）。本作の「PRODUCTION NOTES」によると、本作の舞台となったマイナート家の邸宅は、ベートーベンのパトロンの1人であったアンドレイ・ラズモフスキー侯爵のラズモフスキー宮殿らしい。この邸宅は現在売り出し中だそうで、この邸宅の撮影は大変だったらしい。

この邸宅は、私が「歴代トップ1」に挙げる名作『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）でみた、トラップ一家が住む家と同じく、お城のような大邸宅だ。そんなお城のような大邸宅の主アモンは、エレガントな億万長者であると同時に、早逝した妻との間に生まれた娘パウラ（オリヴィア・ゴシュラー）たち家族と共に過ごす愛情深いファミリーマンだった。また、長年、執事のアルフレート（マルクス・シュラインツァー）も家族同様に接していたから、アモンはトランプ大統領と同じような、実にいい男！？

ところが、本作冒頭映し出されるのは、サイクリングを楽しむ若者が突如銃弾に倒れる風景だが、これは一体なぜ？その狙撃犯は一体誰？そう思っていると、アモンは実はストレス発散のための差別人間を狩る冷血な殺人鬼ということだから、ビックリ！

■□■資本主義の限界は？なぜ超富裕層が出現？■□■

新生・中国（中華人民共和国）は、社会主義、共産主義を目指して1949年に建国されたが、2025年の今は、政治では社会主義（共産主義）、経済では市場主義（資本主義）が共存しているから、貧富の差が大きく、今では“超富裕層”が出現している。他方、「自由の国」として1776年に建国されたアメリカ合衆国も、自由と民主主義を最大の価値としながらも、共和党と民主党の二大政党間の対立は大きい。また、いわゆる1980年代の“新自由主義”の風潮が強まる中、現在の「トランプ2.0」の政治状況下では、トランプ大統領や実業家のイーロン・マスク氏のような超富裕層が幅を利かせている。

ここでなぜそんなことを書いているのかというと、本作を監督したダニエル・ヘーセル、ユリア・ニーマン夫妻は、「世界の政治や経済のリーダーが集まる世界経済フォーラムの年次総会、通称『ダボス会議』の参加者たちと、その会議が行われるスイスののどかなダボスに住む住民との格差を描いたドキュメンタリー『Davos』（20）を筆頭に、監督のヘーセルとニーマンは、社会的均衡のシステムを制御不能に追い込んでいく資本と、その力に繰り返り焦点を当てている。」とINTRODUCTIONに書かれていたからだ。そのため、「利潤追求と社会的課題の解決の両立が成り立たぬ資本主義システムの終結と、超富裕層の無敵さを最大限に誇張し、残酷な物語を寓話的に仕上げた。マイナートの“狩り”を止めることはできない。」としている。

本作のパンフレットにある、森直人氏（映画評論家）のREVIEW「“人間狩り”はグローバル資本主義の、いま、そこにあるゲームである。」は、本作の監督夫妻のそんな問題意識に焦点をあてて、「リバタリアンの女神」の異名をとるアイン・ランドの小説『水源』（1943

年)に言及している。私は、アイン・ランドのことを全く知らなかったが、インターネットで調べてみると、こりゃ何とも興味深い。トランプ大統領とイーロン・マスク氏は「減税法案」を巡って大ゲンカをしてしまったが、これは所詮、大金持ち同士の「子どものケンカ」だ。したがって、マイナス面が大きいことがわかと仲直りするはずだ。

本作の主人公アモンが、大臣への巨額の献金と引き換えに巨大なバッテリー工場の建設を認めてもらう風景を見ていると、なるほどなるほど……。グローバル資本主義下で億万長者になるには、オーストリアでもアメリカでも日本でもこの道しか……。

■『サファリ』VS『ハタリ!』VS人間狩り!■

本作の INTRODUCTION を読むと、ヘースル監督はオーストリアの巨匠ウルリヒ・ザイドルの助手だった経験があり、本作のテーマを“狩り”にしたのは、ザイドルの『サファリ』(16年)が下敷きになっているらしい。そこで『サファリ』を調べてみると、同作は、「野生動物を殺すという娯楽に熱中する人々を捉えた戦慄の狩猟ドキュメンタリー」らしい。

私はこの『サファリ』のことは全く知らなかったが、“狩り”と聞いてすぐに思い出したのが、中学校入学早々に観た、ジョン・ウェイン主演の映画『ハタリ!』(62年)だ。『ハタリ!』は、「ドキュメンタリー撮影の女性カメラマンがハンターたちと行動を共にする作品」だが、そこでは、「動物たちの捕獲に麻醉銃を使用しない」というポリシーが貫かれていたのが特徴的だった。つまり、『サファリ』と『ハタリ!』は、似たようなテーマの似たようなタイトルの映画だが、その本質は完全に正反対のものなのだ。

しかして、本来あってはならないことだが、“狩り”は狩りでも、何と“人間狩り”をテーマにした本作では、冒頭のピクニックを楽しんでいる青年の狙撃シーンがその“人間狩り”のようだから、ええっー! 巨大なコロシウム(闘技場)の中で、奴隷たちが猛獣と命を懸けて闘う姿をローマ市民が楽しく『グラディエーター』(00年)、『グラディエーターII 英雄を呼ぶ声』(24年)、『シネマ 57』73頁)で観たように、ローマ帝国の時代ではそんな残酷なゲームがあったとしても、21世紀の法治国家の中で、そんな“人間狩り”を楽しむなんてことが、本当にあり得るの?

■2代目に注目! 超富裕家族の特権と遺産の承継は?■

民主主義国では「選挙(投票)がすべて」だから、政治の世界に世襲議員はいるものの、その数は少ない。それは、曲がりなりにも選挙のあるロシアでも中国でも同じだ。それに対して、金王朝が3代も続いている北朝鮮では、現在、金正恩の後継者として12歳の娘・金主愛(キム・ジュエ)が注目されている。

それに対して、民間企業の社長は圧倒的に世襲が多い。しかして、本作の主人公アモンが自分の後継者と考えているのは、先妻との間に生まれた13歳の娘パウラ(オリヴィア・ゴシュラー)らしい。そして、パウラは“狩り”と称して何ヶ月も無差別に人を撃ち殺し続けている父親アモンの傍若無人な姿を目の当たりにしながら、“上級国民”としての振る

舞いを着実に身につけているらしい。そのため、ある日「父親と狩りに行きたい」と言い始めたから、ビックリ！さあアモンはどうするの？

そんなパウラの姿を見て、私は即座に金正恩の娘・金主愛を思い出したが、2 人の共通点はとにかく嫌な女ということだ。それはともかく、パウラ役で登場したオリヴィア・ゴシュラーは、まず劇中で扱うカラシニコフの分解と組み立てを学んだそうだから大変。ところがこの若い女優は、数回練習しただけで、教役となった元ドイツの国境兵士よりも早くライフルの分解と組み立てができるようになったそうだから、すごい。

アメリカでは大統領職の世襲はあり得ないが、ドナルド・トランプを頂点とする企業については息子への承継が順調に進んでいる。しかし、日本では日本電産株式会社（現在はニデック株式会社）でも、ソフトバンクでも、ユニクロでも、永守重信、孫正義、柳田正の後継者をめぐる問題は大変だ。それに比べると、本作の「エレガントな億万長者」アモンはまだ若いから、会社の継承問題は発生していないうえ、13 歳のパウラが継承者としての存在感を示せば、金正恩と娘・金主愛との関係と同じように、将来は万々歳！？

そんなパウラは、アモンこそが連続狙撃殺人鬼に間違いないと確信している新聞記者フォルカー・カロッタ（ドミニク・ヴァルタ）をアモンが優しく受け入れ（？）、銃の展示室まで招き入れていろいろと説明している中、とある衝撃的な行動を見せるので、それに注目！こんなモンスター（？）が、将来のアモン亡き後、後を継いだらその企業の行く先は？そしてモンスターの増長ぶりは？

■さらに子供が欲しい！今なら人工受精も！？■

太閤秀吉こと豊臣秀吉の若き日の木下藤吉郎は、やっと武士になることができた若き日の時代、親友（先輩）である前田利家の世話によって、ねねと結婚することができた。ねねは申し分のない妻だったが、唯一の欠点は子供が生まれなかったこと。そのため秀吉は、一方では加藤清正、福島正則、黒田官兵衛、石田三成等々の小姓を育成し、他方ではかつての主君・織田信長の妹で“絶世の美女”お市の方に恋焦がれ、結局お市と浅井長政との長女・茶々を淀君として迎え入れることになった。しかも、側室の淀君との間に 1589 年、53 歳にしてはじめて「おすて（捨）」（後の鶴松）が生まれたが、おすてが病死した後も、「おひろい（拾）」（後の秀頼）が生まれたからすごい。もっとも、秀吉にはもともと子種がないとの説や、この 2 人の子供は淀君と大野治長との間の“密通の子”であるとの説もあるが、その真偽はわかっていない。

本作に見るアモンは先妻との間に生まれた娘パウラがおり、養子のベラ（キラ・クラウス）、ここ（内田珠綺）まで迎えているが、再婚した妻ヴィクトリア（ウルシーナ・ラルディ）との間には子供はいなかったから、アモンもヴィクトリアもどうしても子供が欲しいらしい。そして、その欲求は、豊臣秀吉と淀君と同じくらい強かったようだ。妊娠のためには男と女がせつせと“あること”に励むしかないのは今も昔も同じだが、近時は人工受精という方法もあるから便利。

しかして、本作ではアモンとヴィクトリアがそんな方法に頼り、見事にヴィクトリアが妊娠するストーリーが描かれるので、それにも注目！それにしても、北朝鮮の金正恩の家族もかなり異質だが、一方でパウラに帝王学を学ばせつつ、他方でヴィクトリアとの間に懸命に子作りに励むアモンの姿もかなり異様！それが最もストレートに暴露されるのは、新聞記者のフォルカーから、「気分転換のために狩りをするのですか？」などと事件につながる質問を受けたアモンが、臆することなく「狙撃犯は僕だ、皆知っている」と即答したうえ、「なぜ誰も僕を止めない？君にはその意思があるのか？」と挑発し、「僕の命運は君の意思次第だ」と畳みかけるシークエンスだ。そんな「自白」を得れば、フォルカーの勝利のはずだが、返す言葉を失ったフォルカーはこの出来事を機に、アモンに人間狩りをやめさせようとして、あっと驚く行動に走るの、それにも注目！こりゃ一体なぜ？

■□■3本のレビューはクソ難しいが、これは必読！■□■

本作のINTRODUCTIONのラストには次の通り書かれている。すなわち、

狙撃犯の正体を知る者は、アモン本人、執事アルフレート、新聞記者カロッタ、目撃者アイロス、警察官たち、そして家族の誰か。アモンが逮捕されることにより最も困る者は、多額のワイロと引き換えに事業への便宜を図ってきた悪徳議員たちだ。

家族、警察、政治家、マスメディア…多くの人々が善悪の顔をあわせ持つアモンのカリスマ性に惹き寄せられ、異なる立場や様々な思惑が黒い渦となって水面下でぶつかり合っていく。そしてその先には、さらなる衝撃の事件が待っていた――。

「勧善懲悪」の立場からすれば、本作のラストではアモンの手に手錠がかけられ、パウラも少年（女）院に送りになりそうだが、さて？そんな本作の結末はあなた自身の目でしっかりと！なお、本作のパンフレットには、次の3本のクソ難しいREVIEWがあるので、これは必読！

- ① 森直人（映画評論家）の「人間狩り」はグローバル資本主義の、いま、そこにあるゲームである。」
- ② マライ・メントライン（著述家、翻訳家）の「実在する欧州の『犯罪的』リアル特権階級問題
- ③ 山下宏洋（イメージフォーラム・フェスティバル ディレクター）の「人間狩りはやめられない：資本主義と『我來たり、我見たり、我勝利せり』」

2025（令和7）年6月20日記